

「心の国際化」

ブルース・L・バートン

1998.11.4 放送

今回お話するテーマは、「心の国際化」というものでございます。よく言われるように、われわれは国際化の時代に生きています。世のなかで、国境の壁を越えてどんどん一体化しており、その勢いを止めることはもはや不可能です。こうした国際化が進むなかで、人々の心はどのように変わっていくのでしょうか？人々の心を隔てる壁も時代に合わせてなくなっていくのか？それとも国際化の波はついに人の心まで及ぶことなく終わるのか？

国際化が今の日本にとってとても重要な課題であるにも関わらず、この観点が今までの議論のなかから落ちてしまっているような気がします。国際化の話となると、日本のマスコミや知識人は、安易な決まり文句しか言わないことが多く、その結果、国際化が、一般の人々にとって、得体のしれない、ブラックボックス的な存在になっているのではないのでしょうか。今日はこの場を借りてそのブラックボックスのフタを開いて中身を少し覗いてみようと思います。

さて、国際化とは何か。あまりきちんとした定義を聞いたととがありませんが、敢えて言えば、「国際化」とは日本と外国との壁がなくなって、ヒト、モノ、カネ、情報が自由に行き来する状態を指す言葉だと思います。また、こうした動きの結果、日本と外国との関係が以前よりまして広く、深く、強くなって切っても切れないものとなっていきますが、その意味では日本は国際社会のなかに統合されていって以前ほど孤立した社会ではありえなくなります。この現象を「グローバル化」とでも呼べるとは思います。その原動力は、いくつかの要因があるにしても、基本的には、科学技術の進歩によるものだと思います。技術の進歩とグローバル化の関係については、この数年驚異的に広まってきたインターネットのことを思い出していただくと分かりやすいと思います。

国際化という言葉は非常に聞こえはよくて、多くの日本人は、それに対して明るい、プラス・イメージを抱いていると思われれます。確かに国際化のおかげで、日本人は、世界の優れた商品やありとあらゆる情報を簡単に入手できるようになっています。また、来日中の留学生や、その他の外国人との交流を持つ機会や、旅行などで直接に海外に行つて外国の文化に触れる機会も大変増えてきています。

こうしたさまざまなメリットを考え合わせると、国際化が進めば進むほど、日本人は、今までの島国根性を脱皮して、少しずつ国際人になっていくのではないかという見方ができます。国際交流を仕事としている私の仲間はほとんどこうした明るい将来像を抱いているようですが、こうした考え方は、マスコミを通じて、一般の人々の間にもかなり普及しているように思われれます。

しかしながら、実際問題として、国際化はよいことばかりではありません。というのも、外国人や外国の文化に触れることによって、相互理解が培われることもあれば、逆効果が

生じることもあるからです。このことは一般的な人間関係を思い起こすと分かりやすいと思いますが、たとえば、ある人と一緒にいる機会が増えたからといって、その人と仲良しになれるとは限りません。また、一定の距離を置いたときは何となく理解できたことが、近くで見れば理解できないということもよくあります。このように、国際化の波が打ち寄せてくると日本人がみな国際人になっていくのだ、という考え方は非常に安易と言わざるを得ません。

このことは、世界の一般情勢を見ても分かります。今の世界では、経済的な統合やボーダーレス化が進んでいる一方、民族意識の高まりによる、政治的な分裂も非常に目立っています。この二つの傾向は一見矛盾するようですが、実は、民族意識の高まりは、グローバル化の裏返しに他なりません。国際化時代の到来によって、世のなかが変化して複雑になったときは、人間が、自己意識や精神のよりどころとなるような、身近なものを求めたりするからです。多くの場合、そのよりどころが、民族への帰属心、つまりナショナリズムという形をとります。言い換えれば、ナショナリズムは、グローバル化への反発として必然的に生まれるもので、グローバル化が進めば進むほど、民族問題も目立ってきます。

こうした現象は、日本の歴史にも見られます。日本の近現代史を振り返ると、ナショナリズムの勃発が常に国際関係の行き詰まりや悪化とリンクしていることが分かります。例えば、欧米の列強が迫ってきていた幕末維新期に「尊王攘夷」の思想が流行したのもそのためですし、1930乃至40年代の天皇制ファシズムの確立のきっかけとなったのも、その前の時代の大恐慌を始めとする国際問題だったと思われる。グローバル化が進む過程のなかで、国と国との間に、さまざま摩擦が生じやすいのですが、問題が起こるたびに、それぞれの立場を正当化しようとしたナショナリズムも起こりやすいのです。

現在の国際システムは、第二次世界大戦前ほど危機的な状態とは思えませんが、最近の世界的不況に見えますように、あまりいい方向には向いていません。これから世のなかがどう変わっていくのか分かりませんが、日本においても、他の国においても、民族中心主義やナショナリズムの再発が起こってもおかしくないような時代になっていると思います。一部の学者が「文明の衝突」なるものの到来を想定するのもそのためです。

このように、経済や社会の国際化が必ずしも心の国際化につながるのではなく、むしろ逆効果を生み出す場合があります。そして、現在のように、さまざまな国際問題が表面化してきた時期ほど、そうした逆効果が目立つように思われます。おそらく、日本のマスコミが最近あまり国際交流の話を取り上げないのはそのためだろうと思われます。1980年代や90年代の初めごろなど、日本の経済にまだ活気が残っていて、グローバル化のよい面が目立った時代は、日本人はかなり国際交流に積極的だったような気がします。しかし今はそうした積極性がどこにも見当たらなくなっています。

大変な時代だけに、より重要な課題がたくさんありすぎて国際交流のようなマイナーなテーマに注目している場合ではないと言われるかもしれませんが、逆に言えば、こんな大変なときだからこそ、われわれは意識的に心を開いて、現実の「文明の衝突」にならない

よう努力すべきではないでしょうか？グローバル化は今後も必然的に進むわけで、外の文化や社会との共存がますます大きな課題になっていくから、今のうちに心の準備を整えていきたいものです。

それでは。